

# コロナ禍で53件助成 神戸文化支援基金の取り組み



神戸文化支援基金の助成を受けた日本玩具博物館の井上重義館長=兵庫県姫路市香寺町で、三輪晴美撮影

## 地域の活動

## 見つめて育む

一部に設けた展示室は現在6棟を構えるまでとなり、贈贈も多くの所蔵品は9万点を超える。特筆すべきは、たとえ張り子、土人形などの郷土玩具から昭和のキャラクター玩具、世界160ヵ国分の玩具まで、系統立ったコレクションの質の高さだ。今からでは集まらない。社会の財産だと思っています」。98年に博物館相当施設として認定され、兵庫県文化賞やサントリーニ賞など評価されてきたが、「これまで公的支援はほとんど受けられていない」と井上さんは後悔感を抱く。「貴重な資料を託された責任もある。個人のやる仕事ではない。何か地域の財産として守ってほしい」。それだけに、今回の助

成の知らせに「心にかけてくれる人がいた」と感激した。島田さんは「助成金は今まで所蔵品をまとめた冊子を作成し、配布する費用にあてた。窮状を知つてもらい、将来につなげたい」心だった。配布先からは既に応援の声が届いている。

同じく助成を受けたstorage books(神戸市)は、デザインアートの専門書店。デザイナーの濱章浩さん(39)が12年に設立した神戸デザインセンターの濱章浩さん(39)が12年に

本社会ではまだ理解されない仕事。運んでいただき、感謝と誇りを持って歩んでもゆきたい」。支授決定のメールを何度も読み返した上で寄せたのは、つたの市でギャラリーとライブラリーアーク&ディー。今度は再開したものの10日の来客数は半減し、ギャラリーの本格

開業イベントは面難しく、財団の支援によって、濱さんは「こんな時に声をかけてもらえたのが何よりうれしかった」と話す。

「今後も頑張って続けてもらいたい」と励みになっています。助成金は今後、地域のアートシーンを盛り上げるために使いたい」という。

「上からの」支援ではなく、自分たちで地域の文化活動を掘り起こして「そっと支援を申し出た」と島田さんは話す。

文化芸術活動に対する公的支援を巡っては、文化庁による継続支援補助金の受け付けが7月にスタート。京都市も「京都都市文化芸術総合相談窓口」を開設し、支援基盤の事業を始めた。コロナ禍によって文化芸術活動の課題があらわになる中で、神戸文化支援基金の活動は、社会が「文化」をいかなるものと捉え、どう育もうとしているかを

新型コロナウイルスが文化芸術活動に大きな打撃を与える中、公益財団法人神戸文化支援基金は5月、兵庫県内で活動する団体にいち早く緊急支援助成を行った。助成先からは「明日からの希望につながった」との声が上がる一方、現場の厳しい状況が改めて浮き彫りとなった。

対象は、兵庫県内で5年以上活動する芸術・文化関係の施設や団体。県を6地域に分け、それぞれの事情に詳しい選考委員会の調査・ノミネートを経て決定した。5月中に選考を2回行い、その都度速やかに助成を実施。

助成を受けた日本玩具博物館(姫路市の井上重義館長(81))は、「知らせをもって涙が止まらない」と博物館は、私鉄職員だった井上さんのが勤務時間外に集めた郷土玩具を展示しようと1974年に設立。自宅の

storage booksの店内で開かれたワークショップの様子=同店提供



神戸演劇鑑賞会(神戸市)

国支援が遅れている中、素早い対応に頭が下がる。支援金は会のためだけでなく、神戸の演劇文化のために使いたい。

NPO法人おやアート村(養父市)

メンバーの気持ちが温かくなった。寄付している方々の思いを大切に活用方法を考えたい。

劇団プロデュース・F(姫路市)

アマチュアの一文化団体に助成をいただきありがたい。姫路の演劇の灯をたやすめようがんばりたい。

劇団道化座(神戸市)

団員も外部スタッフもフリーランスが多く収入が途絶えている。支援を明日への希望として難局を乗り切りたい。

旧グッゲンハイム邸(神戸市)

申請によるものではなく、「ちゃんと見てるよ」と信用できる人の目と耳を集約した助成はとてもいいシステムだと思う。